

2000 年の羅臼沖でのスルメイカ豊漁について
(要旨)

佐藤充¹・坂口健司²

Toru Sato,Kenji Sakaguchi

- 1 北海道立釧路水産試験場
- 2 北海道立中央水産試験場

はじめに

羅臼沖は北海道でも有数のスルメイカ漁場である。短期間に大量の漁獲があるため、その漁獲量は、他海域のスルメイカ漁況にも大きな影響を与える。そのため羅臼沖のスルメイカ資源評価ならびに漁況予測は重要な課題となっている。

2000 年の羅臼沖のスルメイカ漁獲量は 3 万 5 千トンと前年・前々年の 4 千トンを大きく上回り、1990 年以降では最も多い漁獲量であった。そこで 2000 年の羅臼沖の漁獲量が過去と比較してどの水準にあるのかを検討すると共に、羅臼沖のスルメイカの生態的特徴についても検討する。

材料と方法

羅臼沖のスルメイカ漁獲量の経年変化を調べ、2000 年の漁獲量と比較をおこない、羅臼沖のいか釣り漁業の CPUE (1 晩 1 隻あたりの漁獲量) についても経年比較をおこなう。

1994 年以降に、釧路水試調査船北辰丸で行われている、スルメイカ調査で得られた標本調査の結果から、羅臼沖のスルメイカ生態について検討をおこなう。

結果

羅臼沖スルメイカ漁場は、1950 年代に開発され、1963 年には漁獲量が 4 万トンを超えた。その後 1970 年に漁獲量は大きく減少し、1970 年代後半からは全く獲れなくなった。しかし 1990 年にはスルメイカ資源増大に伴い、再び漁獲されるようになり、1992 年には漁獲量が 2 万トンにまで回復した。1995・1996 年に 2 万トンの漁獲が続いたが、1998・1999 年と 4 千トンに減少した。2000 年の漁獲量は 3 万 5 千トンであり、1960 年代に匹敵する漁獲量であった。

釧路水試では、1965 年から羅臼沖のいか釣り漁業における CPUE の調査をおこなっている。1965～1969 年の CPUE は 2～4 (トン／隻・晩)、1970～1975 年の CPUE は 2 (トン／隻・晩) 未満、1993～1999 年は 1～2 (トン／隻・晩) であった。2000 年の CPUE は 5 (トン／隻・晩) と高く、1960 年代よりも高くなっている。

1994 年から 2000 年におこなった標本調査の結果、スルメイカの外套長は 24～25cm が主体となっている。しかし 1994・1998・1999 年では 20cm 以下にももう一つのモードが見られている。この海域では成熟した雌の個体が出現することは稀で、成熟した雄の個体も 1 割以下の年がほとんどである。

1994 年の標本について、平衡石の輪紋数計数による、発生期推定をおこなった。その結果発生時期は、1 月から 4 月までであった。外套長 24～25cm の発生時期は 1 月～2 月であり。これまで言われていたとおり、冬生まれ群であることが確認された。しかし単年の結果のみであり、今後経年の解析を進めていく。